



コロナ禍も「命あつての物種」 — 検査・援助・市民社会

すぎもと よしお
杉本 良夫 ●ラトローブ大学名誉教授 社会学

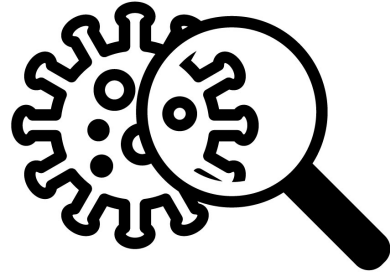
南半球はそろそろ真冬に入った。わが家の近所では、ツバキ、ツツジ、ノボタンなどが咲き乱れている。例年なら、そんな花々を見て、心楽しいのだが、今年はコロナ禍で、散歩以外はほとんど家籠もりである。

オーストラリアは7月17日現在で、死者が113人。アメリカや欧州、南米で、何万人もの人が亡くなったの比べると、最低の被害ですんだ。人口当たりの死者数も日本のほぼ半分である。コロナ退治に最も成功した国のひとつだと言われるが、私たちの住むメルボルン都市圏には、7月8日以来6週間の外出規制が敷かれている。この先どうなることやら。しかし、お陰で私自身はまだマスクを付けたことがない。

何といっても、打つ手が早かった。2月になって、世界的流行の兆しが見え始めると、即座に中国からの留学生の入国を禁止。その後すぐ、海外からの入国者全員にストップをかけた。いまでも、その統制は続いていて、海外からオーストラリアに入ってくる人は、みんな2週間、ホテルなど政府の指定した場所に滞在して、検疫下に置かれる。国民と外国人の区別なしだ。外へ出る自由はなく、出かけたことが発覚すると、罰金を取られる。一種の鎖国政策である。いまだに一般旅客用の国際便は飛んでいない。州の間の移動も、2か月余り厳しい規制状態が続いている。

3月23日には外出禁止令が出た。スーパーマーケットや薬局、医者など必須の外出以外は認められない。レストラン、パブ、喫茶店、バー、ナイトクラブなどは一斉閉鎖。親戚や友人でも、家中へ入れてはいけないという制限がかけられた。これらは全て要請ではなくて命令である。私たちの住むビクトリア州では、違反者にかかる罰金が、ひとりにつき1,600豪ドル(約11万7千円)。家に30人を招いて、大きなパーティーを開いたのが見つかって、招待した人も、された人も、それぞれが制裁金を支払わされるというケースもあった。感染を防ぐための強行突破である。これらの厳しい規制は状況の改善と共に、取り除かれたが、初期は超スピードで履行された。コミュニティー全体の健康と命を何よりも先行させることについて、与野党の間に強い合意があり、全国労働者連合も支持した。市民社会の幅広い是認があった。

コロナ禍の広がりを防いだのは、徹底的な感染検査である。テストを受けた人の数は、320万人を超えている。全人口の1割以上が検査を受けた勘定だ。医療関係がテストを奨励し続けた結果だろう。特に発熱や咳・水漬などの症状のある人は、ぜひ検査を受けるよう呼びかけが続いた。検査所は医療機関やショッピングセンター、大型駐車場だけではない。手軽にテストを受けられるようにするため、移動検査車も出ていて、路上でテスト



を待つ人の列が出来ている。ドライブ・スルーの検査所もある。テストを応援するために、軍隊も出動した。災害地へ自衛隊が派遣されるのと似ている。症状があってもなくても、受検が奨励されていて、人びとは自主的に検査を受けてきた。もちろん、テストはすべて無料である。

一方で、救済処置も早かった。経済が一時動かなくなるのだから、失業者が出る。それを最小限度に抑えるために、ジョブ・キープというプログラムが施行された。コロナ騒ぎで職を失いそうになる人をつなぎ止めておくことが目標だ。パートや非正規でも、同じ職場に1年以上働いてきた人たちには受領資格がある。週につき、ひとり750豪ドル(約6万円)を、4月から9月までの6か月間、政府がずっと支払い続けるという政策だ。日本円にして、ひとり当たり、半年の総額が約140万円。大盤振る舞いである。まず雇い主に払い込まれ、そこから労働者に支払われる仕組みだ。

他にも、いろんな救済政策が矢継ぎ早に打たれた。家屋やアパートを借りている人が家賃を払えなくなっても、家主は追い出すことが出来ない。銀行のローンを返せなくなった人たちは、一定期間支払わなくてよい。積み立てた年金の一部を引き出すことが出来る——等々。

コロナ禍は、市民の健康と民主主義という問題をも生み出した。アメリカでは人種差別をめぐる

抗議行動が、オーストラリアにも影響を与えたからだ。先住民に対する警察の取り扱いに差別があるという主張が広がり、大都市で万単位のデモが実行に移された。人と人との接触の危険が大きくなるから、抗議行動は中止すべきだという見解が、医療関係者を初め、慎重派から続出した。抗議派は健康危機の最中といえども、民主的権利は守られるべきだと主張して、強行に踏み切った。

落とし穴もある。私たちの住むメルボルンでは、中近東からの移民の人たちが多く住む地域で、コロナ問題についての意思疎通が不十分だった。英語がよく分からず、仲間の間の不確定な情報を頼りに行動している発症者があちこちを移動したため、その地域の周辺で感染者が一気に増えた。こうした地域には、テストを受けてもらうために、医療関係者による戸別訪問などのローラー作戦が展開されたが、及ばなかった。飛び火が全市に広がり、外出規制が執行された。オーストラリア全体としては、封じ込めに成功しておきながら、メルボルン都市圏だけが、元の本阿弥状態である。

死者の数が膨れあがってから、慌てても後の祭りだ。命あつての物種である。来年の冬はコロナの心配などせずに、ギリシャ系親子の経営する近くの喫茶店で、ゆっくりコーヒーを楽しみたい。